

重なる

第18期生 加藤 愛奈

「学問の面白さを知りたい。」私が小野ゼミを志望した理由は、この一言に尽きる。学問には、時も国も超えて多くの人々が、人生を捧げてきたらしい。そんなに面白いものはずなのに、私は高校と大学では授業や試験から逃げてきたせいで、恥ずかしながら、ろくに何かを学んだ記憶がない。「ああ、勿体無いことをしてきたな」と、大学2年時に留年スレスレ仲間の中で楽ゼミ情報が飛び交う中、なんだか悔しくなった。遠い記憶を辿ってみると、14歳で帰国して塾に通い始めた自分は、初めて触れる国語と算数が面白くて仕方なくて、寝ることも忘れて夢中になっていたような気がする。好きだったものの魅力を忘れてしまうことの虚しさは、趣味の面で既に嫌というほど味わってきたはずなのに、知らぬ間に同じ過ちを繰り返していたことに気づいて、より一層悔しくなった。「学問を面白いって感じられる人っていいな。私も、また楽しめるようになりたい。」そんな気持ちで、小野ゼミの門を叩いた。

半ば勢いで決断したこともあり、「学部イチのエグゼミ」という異名を知ったのは、実は入会後だった。それを知った時から、2年後に、ゼミ活動をどれほど頑張ったか、何度辞めたいと葛藤したか、そんなことを卒業エッセイに綴る自分を思い描いてきた。しかし、活動を苦に思ったことは、1秒たりとも無かった。これは、周囲からの多大な支えに加え、小野ゼミの洗礼(aka.コトラ)から卒論完成まで、「面白いなあ」という感動が途切れなかったからだ。学問が面白かったなんて言ったら、「パンの耳を少し齧った程度で何を偉そうに」と思われるかもしれない。もちろん、学問の面白さを完全に理解できたとは、微塵も思っていない。ただ、「こんな研究があるなんて!」「こんな風に考える人がいるなんて!」と、心躍った瞬間は数知れず、私はそれが堪らなく幸せだ。思い返してみると、論文を読み漁り、執筆に没頭して徹夜を繰り返した22歳の自分は、国語と算数に夢中になって寝ることを忘れた14歳の自分に、どこか重なる気がする。

卒業エッセイは自分語りの場だと聞いたが、ここからは、未来の自分への「こんなに人に恵まれていたこと、忘れんなよ!」という意を込めて、末筆ながら、お世話になった方々について記したい。まず、小野晃典先生の温かく、時に厳しいご指導なしには、卒業論文を執筆することはおろか、学問を再び面白いと感じることは絶対に叶わなかった。次に、先輩方が、私たちに全身で向き合ってくれて絶えずご指導くださったからこそ、私は常に前を向き楽しむことが出来た。実際、第17期生の江崎舞香さんが入ゼミ時にくださった手紙は、今でも時折見返すほど、私の原動力になっている。また、第19期生は、こんなボンコツの先輩を慕ってくれて、みんなも頑張っているから私もと、何度も踏ん張らせてくれた。そして、同期は、最高に賢く逞しい人たちで、このチームの一員として2年間を過ごせただけで小野ゼミに入ってよかったと、心から思う。最後に、ゼミ外の友人らは、心身ともに面倒を見てくれたり、絶対的な味方でいてくれたり、お尻を叩いてくれたりと、実に色々な形で支援してくれた。感謝したい人を挙げ始めたらキリがないが、書けていない人を含む、周囲の人が誰1人と欠けても、私はこんなにも幸せなゼミ生活を送れなかった。皆さんとの思い出を胸に、今後も面白いものを追いかけていきます。本当に、2年間ありがとうございました。